

牧水紀行

若山牧水選集 2

編 集

若山喜志子・長谷川銀作

SHUNJŪ BOOKS

牧水紀行

編集 若山喜志子・長谷川銀作

解説 中西悟堂

若山牧水選集 2

SHUNJŪ BOOKS

略 歴

若山喜志子—明治21 (1888) 年 長野県に生まる。牧水夫人。歌集『筑摩野』『眺望』等あり。『創作』発行者。現住所 立川市富士見町2の72。

長谷川銀作—明治27 (1894) 年 静岡県に生まる。歌集『桑の葉』『木原』『夜の庭』等、評論集『牧水襟記』あり。『創作』編集者。現住所 東京都世田谷区世田谷2の2068。

牧水紀行

〔若山牧水選集・第2巻〕

1961年12月10日 第1刷発行 定価 ￥250

検印
省略

編 者 若山喜志子
長谷川銀作

東京都千代田区神田宮本町10

発行者 神田竜一

東京都千代田区神田鎌倉町13

印刷所 鎌倉印刷株式会社

発行所 東京都千代田区 株式 春秋社
神田宮本町10 会社

電話 神田 (251) 4715, 6575 振替 東京 24861

(小林製本) 落丁・乱丁はお取替いたします。

小B 6判・総頁192

N. D. C. 918.

目次

岬の端	五
浴泉記	三
塩釜行	六
津軽野	三
比叡山	六
山寺	四
熊野奈智山	四
富士裾野の三日	七

溪ばたの温泉	………	七〇
上州草津	………	九
みなかみへ	………	一〇
利根より吾妻へ	………	一四
吾妻川	………	一三
みなかみ紀行	………	一五
鳳来寺紀行	………	一七
牧水の旅	………	中西悟堂 一五

題 字 若山喜志子

牧
水
紀
行

凡 例

本巻に収録した牧水の紀行文の旅行年代はつぎのとおりである。

岬の端 大正四年晩夏か。大正五年出版の『旅と

ふる郷』に収録。

浴泉記 大正七年二月。大正七年出版の『海より

山より』に収録。

塩釜行 大正五年三月。同。

津軽野 同。同。

比叡山 大正七年五月。大正八年出版の『比叡と

熊野』に収録。

山 寺 同。同。

熊野奈智山 同。同。

富士裾野の三日 大正九年十月。大正十年出版

の『静かなる旅をゆきつつ』に収録。

溪ぼたの温泉 大正九年五月。同。

上州草津 同。同。

みなかみへ 同。同。

利根より吾妻へ 大正七年十一月。同。

吾妻川 同。同。

みなかみ紀行 大正十一年十月と十一月。大正

十三年出版の『みなかみ紀行』に収録。

鳳来寺紀行 大正十二年七月。単行本に収めら

れず。

岬みさきの端はな

こまかな地図をみればよくわかるであろう、房州半島と三浦半島とがするどく突き出して、奥深い東京湾の入口をきわめてせまくくくっている。その三浦半島の岬端みさきはなから三、四里手前に湾入した海浜に私はいま移り住んでいるのである。で、その半島の尖端とうばなの松輪崎というのには私たちの浜からやや右寄りの正面にほそくするどく浮かんで見える。方角ほうかくはちょうど真南まみなにあたる。また、前面ぜんめんといったいは房州半島で、五、六里沖に鋸山のこざきやまや二子山が低くそびえ、ひだり手浦賀寄りの方には千駄崎という小さな崎が突きでている。だから眼前の海の光景はちよつと見には四方とも低い陸地にかこまれた大きな湖のようで、風でも立たねばまったく静かな入江いりえである。それで、奥には横浜あり、東京あり、横須賀があつて、そこへ往來の汽船軍艦がしじゅう出

入りしているので、つねに沖辺に煙のかげをたたず、何となく糜爛ひりらんした、古い入江の感をもあたえる。

私のいるのは千駄崎寄りの長さ二、三里にわたった白浜で、松のまばらになびいた漁村である。浜に出ると、正面に鋸山が見える。つづいて目につくのは、右手に突き出た松輪崎である。こまかくおぼろに霞かすみの底にしずんでいたときも、うすうすと青みそめた初夏のころも、つねになつかしく心を惹いていた。一度その崎の端まで行つて見たいとは、早春こちらに移つてきて以来のながい希望であつた。盛夏のころ一月あまりを、私は下野・信濃の山辺に暮らしたのであつたが、帰つてきてながめやつた海面は、いつのまにかすっかり秋になつていた。日ごとにかすかな西風にしが吹いていて、沖おほいたいにしらじらと小さな波が立っている。とりわけて目をひいたのは松輪崎の尖端とうばなに立つてゐる白浪で、西からくる外洋のうねりをうけ、きわだつて高い浪がまっ白にうちあげて、やがては風に散つて、そこらをうすうすとけむらせてゐる。

そこからずつと脊をひいた岬みさきといったの輪郭りんかくは、秋

めいた光のかげに、くっきりと浮き出て見えている。

ある日、とりわけて空の深い朝であった。食後を縁側の柱に凭^よつていたが、とつぜん座敷の妻を見かえた。

「オイ、おれはいまから松輪まで行ってくるよ、いいだろう。」

「いまから？」

と妻はおどろいたが、かねて行きたがっているのを知っているのだ、とめもしなかった。

「そして、いつお帰り？ 今夜？」

「さア、よくわからんが、あすこに宿屋があるというから、氣にいったらひと晩かふた晩泊まってこよう。イヤだったらすぐ帰る。」

いくらかこづかい錢^{せん}をわけてもらって、私はいそいそと家を出た。風が砂糖黍^{とうもろこし}の青い葉^はさきに流れて、きょうも暑くなりそうな日光が、きらきらと砂路にかがやいている。

道路をそれてすぐ浜に出た。下駄をぬいで、手ごろ

の縄にとおして提^ひげながら、たかだかと裾をはしょった。波打ちぎわのぬれ砂のうえを歩いてゆくと、爪先がこころよく砂に入^いって、おりおりは冷たい波がさアっと足の甲を洗う。

きょうも風が出ていた。渚^{なぎさ}から沖にかけて、海はしらじらとざわめいている。ふと目をあげると、思いもよらぬ方にほんのりと有明月^{ありあけつき}がのこっていた。沖の波に似た白雲のかけらが風に流れて、紺ふかく澄み入った空の片^{かた}辺に、まったく忘れたもののようにかかっている。ア、と思う自分の心の底には、早や、久しく忘れている故郷の山川がさびしい影を投^なげていた。故郷と有明月、なんの縁もなさそうだが、有明月を見ると、どうしたものか私はすぐ自分の故郷を思いおこすのがくせである。溪間^{たにま}の林のあいだを歩いて自分のおさない姿を、すぐ思いうかべる。

その朝は、なぜか渚に漁師の姿がすくないようであった。下駄を砂上にひきずりながら、私はこの有明の月をどうがなして一首の歌に詠もうもの、夢中になつて苦心した。一里あまり二里ほども歩いてゆくうち

に、とうとうその一首もできず、雪のような浜はつきで、まっくらな岩の磯があらわれた。浪の音が急にたかく、岩上に吹く松風の声も、ありありと耳にたつ。ともかくもと私はそこに腰をおろした。足のうらがちくちくと痛んでいる。雲のかけらはしだいに消えて、白い月影の美しいよさびしい。

たいがいの見当をつけて崖をはいのぼってみると、はたして小さな路があった。こんどは下駄をはいて、松や雑木の木の間をたどる。ずっと見はるかす左手の海の面が、いかにも目あたらしくながめられて、ツイ磯の深い浪のあいだには、無数の魚が群れていそうに思われる。小さな丘を越すと、一つの漁村があった。金田という。もひとつ越すとまたひとつあった。せまい溪谷みたいなところに二、三十戸、小さな家が集まっている。なかに一軒お寺があつて、しきりに鉦が鳴っていた。風のせいかな、ここの漁師も沖を休んでいるらしく、そこそこに集まってあそんでいた。小さな茶店に休んでいると、そこにも四、五人がいて、なにか戦争の話がはずんでいた。村出身の予備後備の軍人の話

で、いまひと戦争あつて引き出されると、おれもこれでまたひと稼ぎできるがなア、なにしろこう不漁じゃしょうがねえと、図どい声を出したのを見ると、もう五十歳に近い大男であつた。年金をあてに戦争に出たがる、耳あたらしいことを聞くものだと思つた。

それからしばらくけわしい坂になつて、登りはたところは山ならば嶺、つまりこの三浦半島の背であつた。かなりひろい平地で、さつま芋と粟とがいつぱいに作つてある。思はず背のびして見わたすと、遠く相模湾のほうには、夏の名ごりの雲の峯がうずまいて、富士も天城もいぶつた光線につつまれて見えわかぬ。

眼下の松輪崎の前面をば、戦艦だか巡洋艦だか大きながそろつて四隻、どすぐろい煙をはいて湾内を指している。このごろ館山港に三十隻からの軍艦が集まつて、それから垂れ流す糞便で、ところの者は大困りだという二、三日前のだれかの話をふと思ひ出した。その演習も終わつて、いま横須賀に帰つてゆくところであろう。こうして、そろつた姿を見ていると、なんとはなしに血のおどる心地がする。松輪への路をきく

と、芋畑のなかにいる爺^{いじ}さんが伸びあがって、その電信柱について行きさえすればまちがいはない、と教えてくれる。なるほどこの丘の背をとおして電信柱がつからなっている。そしてそのさが小さくなっている。

やがて柱の行列のつきるところにきた。なるほど、この電線は、この岬端にある剣崎燈台（土地では松輪の燈台と呼んでいる）にかかっているものであったのだ。燈台は、いまはただ白々といかめしい沈黙をまもって日にかがやいているのみである。そして、付近に人家らしいものも見えぬ。あちこちと見まわしていると、すぐ眼下^{がもと}の崖下にそれらしい一端が見えている。私はいさんで坂を降りて行った。のどもかわき、腹もすいていた。

降りて行っておどろいたことには、そこは戸数五十近くのふるい宿場^{しゆくば}じみた漁村であった。前に小さな浅そうな入江があつて、山かげのことでびったりと静まっている。ひとわたり歩いてみたところでは宿屋らしい家も見えず、腰かけて休むべき店すら見つからぬ。

ここが松輪かときくと、そうだという。かねて想像していた松輪には、小ぎれいな宿屋か小料理屋の二、三軒もあつて、なんとなく明るいにぎやかな浦町であつた。これはこれはとあきれたり弱ったりしたが、なにしろ飯を食うところがない。宿屋が一軒あつたが、客がないのでいまはやめたのだそうだ。それならもう少し歩いて三崎までおいでなさい、これから一里半ぐらいのものだと、その漁村のはずれのわらぶきの家に帰りおくれた避暑客ともいふべき若い男が教えてくれる。のぞくともなくのぞくと、年ごろのやせがたのひさし髪^{がみ}が、双肌^{ふたはだ}ぬぎの化粧の手をとめてこちらを見ている。その前の鏡台からして土地のものでない。仕方なく、礼をいいながらそこを去ってすこし歩くと、小さな掛茶屋があつて、やや時季おくれの西瓜が真紅に割^きかれてゐる。そこに寄ってこぼすともなくぐちをこぼすと、イヤ宿屋はあるにはあるという。エ、ではどこにあるといきこんで問い返すと、燈台の向う側にいま一カ所、ここみたいな宿場があつて、そこにさくら屋というのがあるという。いい宿屋か、海のそばかと

たたみかければ、二階建てで、海のそばで、夜は燈台の光を真上に浴びるという。それではと、やにわに私は立ちあがった。そして教えられた近路をとっていいだ。これで今夜はたのしくすごされる。かねてたのしんでいた独りきりの旅寝の夢がむすばれると、もうそのことばかり考えていそいだ。前の丘を越えもどって、燈台の下の磯を目がけて行くと、木がぐれに二、三の屋根があらわれ、やがて十軒あまりの部落に出てきた。まず目についたはさくら屋という看板で、黒塗りのブリキ屋根の小さな軒にかかっている。海のそばという私のことばには、すぐ浪うちぎわの岩の上にもそそり立っているところを想像していたのであったが、これはせまい砂浜のすみに建てられたマッチ箱式の二階屋である。ふたたびおどろいたが、もうがっかりする勇氣もない。私はつかつかとその店頭へ歩みよった。

むくむく肥^{ふと}った四十恰好^{かっこう}のおかみが何だか言っているのを聞き流して、私はとりあえずその店さきにある井戸ばたに立った。頭から背から足さきまで洗い流

して、すぐ二階にあがろうとした。またおかみが何か言う。あまりに頬の肉が豊富で、口はその奥にひっこんで、しかも歯が欠けているため、何を言うのかはなはだ解しにくい。下座敷がよくはないかというようなことではあったが、私はずんずんはしご段を上ってしまった。そして海に向いたほうの部屋の障子を引きあけてみておどろいた。そこはふさがっていた。しかも三十前の男女がおそろしいふうをして、まだ蚊帳のなかに寝ている。あわててそこを閉めたが、サテほかには、その反対側にいま一つきり部屋がない。てれかくしに、こわごわそれをものぞいてみると、三畳ぐらいで、しかも日がまともにあたっている。

すぐすぐ下に降りると、おかみは笑いながら奥の間（といっても、これよりほかに座敷らしいところはない）の縁側に近いところへ座ぶとんを直した。ともあれビールを一、二本冷やしてくれという、そんなものはないという。いよいよなまけなくなつたが、それでも酒はおしつかえすと、どのくらい飲むかとときく。何しろたいへんなものであろうが、とにかく少しでも

やってみようと決心して、二合ばかりつけてくれ、それに罐詰でも何でもいいからすぐ飯を食わしてくれと頼むと、罐詰もないとつぶやく。そして小さな燗徳利を持って戸外へ出てゆく。オヤオヤ二合だけ買に行くと見える。

裸体になって柱に凭っていると、さすがに冷たい風が吹く。日のかんかん照っている庭さきには、子供が三人長い竿で蜻蛉を釣っている。赤い小さいのがいくつもいくつも、あちらこちらと空を飛んでいるのだ。二階で起き上がった氣勢がして、何やら言いあらそっている。その声の調子から、二人とも芸人だなとすぐ気づかれた。降りてきた男を見ると、髪が長い、浪花節だなとまた思う。女のほうはずっと若く、きれいな荒んだ顔をしていた。

むくむく動いておかみさんが帰ってきた。そしてまた蜻蛉釣の子供を呼んで、何やらむくむく言いつけている。やがてものを焼く匂いがする。ははア壺焼だなと感づいたころは、もうよしあしなしに燗のつくのが待ち遠かった。

案じていたほどでもないと思うと、すぐまたあとを酒屋に取りにやった。少しずつ酔のまわるにつけて、何となくあたりが興味ふかく思いなされてきた。やはりはじめの思い立ちどおり、ここにひと晩泊って帰ろうか。それともこのままひと睡りして、夕方かけてさっきの路を歩こうか、浪花節語りと合宿もおもしろいかも知れぬ、肥つちよのおかみさんもおもしろうだ、などと考えていると、しだいに静かな気持になってきた。柱にもたれたまま、ななめに仰ぐ空には、たかだかと小さな雲がうかんで、庭さきの、何やらの常盤樹の光もつめたく、自身をのみとりまいていような単調な浪の音にも急に心づき、秋だ秋だと思う心は、酒とともにしだいに深く全身をめぐるはじめた。またしても有明月の一首をどうかしてものにしたいと、空しく心をついやす。

二度目の酒もおわった。飯もすんだ。泊まろうか帰ろうかの考えはまだまとまらぬ。そのうち二階では、また何か言い合いはじめた。こわれたラッパのような男の声にまじっている女の声は、まるでブリキをすり

あわせているようだ。それにしてもなかなかいい女だ、
久しぶりにああした女を見た、などとまたあらぬこと
を考えはじめる。

うとうとしていると、突然ぼう——っという汽船
の笛が、すぐ耳もとに落ちてきた。

三崎行だな、と思ったときにはすでに半分私は立ち
あがっていた。

「おばさん、勘定々々、大急ぎだ。」

「……？」

「三崎だ三崎だ、大急ぎ！」

かけつけたときはちょうど砂から艇はしけをおろすところ
であった。身がるに飛び乗ると、するすると波の上に
うかび出た。小さな、黒い汽船は、ややはなれた沖あ
いに停とどまって、まだ汽笛を鳴らしている。房州の端はなが
まじかに見え、右手はむしろ黒々とした遠くひらけた
外洋である。せっせと押し進む艇の両側には、鯉かつおから
でも追われてきていたか、波のおもてがうす黒く見え
るくらいまでに集まった鯉かつおの群がばらばらとはね
あがった。

浴 泉 記

二月七日 雨後曇

午前四時半起床、お茶だけ飲んで家を出る。雨だと聞いていたのは、みぞれであった。六時二十五分東京駅発、横浜で弁当。平塚あたりからうすい日がさしてきた。わずかに切れた雲のあいだに箱根足柄あしがらの山がみえ、みなまっしろに雪をかぶっている。国府津駅こうつづ前の海がにこった浪をあげている。風が出たのだ。山北、御殿場、ことごとく積雪、富士は現に降げんっているらしい、黯暗ようあんな雲がいちめんに垂れさがっている。十時何分沼津駅下車、ただちに俤くるまにて狩野川の川口へ。ろくろく酒のあたたまらぬうち汽船が出る。おそろしく冷たい風で、江の浦、内浦の眺望も、富士の雪景もみなあきらめて、穴ぐらのような船室に小さくなってころがる。午後二時半、土肥とひ着。

このまえきたとき泊まった明治館というへ行く。

海岸から四、五丁奥まった山ぎわだ。土肥では大きなほうで、湯もわりにきれいだ。このまえはちょうど正月の二日でたいへんこんでいたが、今度はそうでもあるまいと思つて行くと、また満員だという。足利時代からあったという付近の金鉱をこのごろ新たに発掘に着手したとか、するとかいうので、そのほうの人たちがつめかけているのだそう。オヤオヤと思ひながらつっ立っていると、そこのおかみが、もしただ静かなだけをよいにして頂けるなら、土蔵どぞうの二階があいているがどうでしょうという。ほかを探すのもめんどうになつていたところなので、とにかくそれを見せてもらう。土蔵はずっとひっこんだ裏手に独立して建てられて、階はうというのは十畳に四畳半の二室、畳もさっぱりしていて天井もりっぱだし、かつそれほど低くない。窓がただ普通の室らしくないが、それでも各室二カ所、ガラス戸づきで開かれてある。土蔵だけにがっしりした造りですっきり四辺あたりと隔離した静けさをもっている。私はよろこんだ。これはかえっていい、不便

なくらいは我慢する。第一、隣室というものがないのが気に入ったと、私はそこに腰をすえることに決心した。掃除をさせ、荷物をもって来させ、湯からあがって、サテそこに置いてある椅子に凭ると、真赤な夕日のはるか海上に、いま落ちてゆくところであった。海岸の松原が墨のようだ。心配していたほどでなく、夜はよく睡れた。しかも十二、三時間あまり。

二月八日 晴

何ということなく、からだの疲れているのに気がつく。朝、鼻をかむと血がまじっている。のぼせているのだと思う。湯は熱くなくぬるくなく、いい加減である。葉書を三、四枚書いたまま、持ってきた『白痴』を読んで暮らす。夜またよく睡る。まったくこの室は静かだ。すこし気味のわるいくらい。

二月九日 快晴

けさまたすこし鼻血。あまりいい天気なので海岸に出てみる。くるとき汽船から見ておいた港の向う側の

断崖のほうへまわって、あぶないあぶないと思いつながら、とうとう下まで岩伝いに這いおり、日あたりの岩の窪に坐って一時間あまりを過ごす。まさおに湛えた岩と岩とのあいだの狭い入江には、きょうは浪という浪もない。たばーんざぶり、ざぶざぶというけるい音がすぐ脚下の岩のかげにつづいていて、よく見れば蒼い底には、木の葉のような小魚が列をつくって泳いでいる。おりおり立ちあがって沖のほうを見ると、いっぱいの光で、舟も帆も見えない。どこを通過しているのか石油発動船の音が遠くなり近くなりして、ものがなしく聞こえている。海越しの駿河路といったの山には雲が輝いて、海岸ぞいに淡く霞がなびいている。手帳のなかに葉書が三枚入っていたのをみつけて、友人へ書く。夢の世界のような静かな一時間であった。すこし風邪気味なので、むしろ抵抗療法になるかと思ひ、幾度も入浴する。結果はいいようである。散文集『海より山より』の原稿の一部を整理する。

二月十日 雨後曇

朝来微雨、きのうのつづきの机に向う。私は二つの

窓のうち、東北に開いているほうの側に机をおいているのだが、すぐ下は葱と大根の野菜畑で、そのさきに二側だけの人家がならび、その向うは山となって、樟そのほか常盤樹のしげった鎮守の森がすこし見え、そのほかは、蜜柑畑と杉と雑木の山とが全面に見えるようになっている。杉も雑木も、こうしてかすかな雨のけむっているところはまるで春である。やがて昼かけて豪雨となる。郵便はじめて来る。葉書二、雑誌一、雑誌は二月号の『創作』である。たいへんに遅刊したのを出来あがるまで待ちもせず、こちらへ出かけてきたのであったが、印刷所で無断で紙質を落したりなどしていて、いかにも見すばらしい。いかに体裁にかまわぬ雑誌だとはいいいながら、これではあんまりだなどとながめられる。

雨がようやく小降りになったころ、女中があわただしく馳け上がってきて来客だという。おどろいていると、真赤な顔をして松井白花君が上がってきた。昨夜お葉書を拝見したらたまらなくなってやって来ました

と言う。何しろ意外なので、手を取りながらもなおふしぎな気がしている。出て三、四日にしかならないのだが東京のうわさなど早やなつかしい。夕方大いに馳走をとりよせて遠来の友をねぎらう。晩酌は毎晩二合ずつときめておいたのだが、こういう相棒を得ては我慢ができない。土蔵の二階、今夜大いににぎわう。

二月十一日 曇

重づめをこさえてもらい、酒の壺をさげて二人して海岸に出かける。曇っているのが難だが、松井君も勤めの身で、きょうの午後の船でまた帰らねばならぬので、晴れることもあろうかと、おぼつかなく空をながめながら出かける。おととい行った荒磯へ行ったのだが、その日とちがい、風はひどく、日は照らず、寒くていけない。やがて大きな洞窟をみつ、付近から山のように燃料をあつめ、どんどんと火を焚きながら二人それぞれ席をつくる。洞のことで風はなし、しだいに火が大きくなると、すこし過ぎるくらい暖かくなってきた。火のそばにならべておくと、壺はおのずから